

1D-3 難治性小児てんかんに対する TRH-T 投与法に関する検討

1) 順天堂大学医学部附属順天堂浦安病院小児科

2) 順天堂大学医学部小児科

高橋 寛¹⁾, 辻 淳子¹⁾, 金子堅一郎¹⁾, 大塚親哉¹⁾,
斉藤昌宏²⁾, 許 慶子²⁾, 新島新一²⁾, 高橋系一²⁾

小児の難治性てんかんに対して TRH (Thyrotropin releasing hormon) の誘導体である酒石酸プロチレリン (以下, TRH-T) の有効性が注目されている。TRH-T には注射剤と錠剤があり, 難治性てんかんに対してこれら剤形の使い方の検討をした報告は少ない。私達は, 種々の小児の難治性てんかんに対して注射剤あるいは錠剤の TRH-T 療法を行ない, その使用方法と臨床効果を検討したので報告する。

【対象および方法】対象は, 症例 1: 新生児けいれん (発症 7 日), 症例 2: EIEE (発症 7 週), 症例 3: 点頭てんかん (発症 4 カ月), 症例 4: SMEI (発症 6.5 カ月), 症例 5: kojewnikow 症候群 II 型 (発症 3 歳 4 カ月), 症例 6: 進行性ミオクロヌステんかん疑 (発症 2 歳 4 カ月) の計 6 例である。TRH-T 注射剤は 1 回 0.5 mg 筋注もしくは静注で 2 ~ 5 週間, TRH-T 錠剤は乳児には 1 mg, 幼児には 4 ~ 8 mg 投与を原則とし, 投与期間は特に決めなかった。

【結果】けいれん発作の消失ないし減弱は症例 1, 4 および 6 でみられ, 症例 5 では精神活動の改善のみがみられた。症例 2, 3 は無効であった。症例 1 は TRH-T 筋注開始 6 日目より発作が消失したが, TRH-T 筋注 14 日間終了後約 1 カ月で再発した。症例 4 は TRH-T 筋注開始 20 日目より発作が消失し, 経口投与に変更後 9 週で再発したため, 再び筋注に変更後 10 日目で発作が消失した。さらに, 筋注の漸減により発作が再発したため連日筋注に変更し, 10 日目より発作が消失した。症例 6 は筋注開始 2 週目より発作が消失したが経口投与に変更後小さなミオクロヌスのみが再発している。

【考按および結語】有効例では TRH-T 筋注開始後約 1 ~ 3 週で発作が消失した。これらの症例には, 続いて TRH-T の経口投与に変更しても発作がしばらくの間みられなかったり軽減したままの状態を続けるものがあった。TRH-T の注射療法で効果がみられた場合に, TRH-T の経口投与に切りかえて療法を続ける方法はその投与量を含め今後検討すべきと思われる。

1D-4 抗てんかん薬が身長発育及び Sm-C 分泌能に与える影響について

山梨医科大学小児科、小海赤十字病院小児科*

畠山和男、清水 晃、大山建司、相原正男、日野原陽一*
加藤精彦

【目的】 抗てんかん薬 (AED) がてんかん患児の身長発育、骨年齢及びソマトメジーン C (Sm-C) 分泌に与える影響について、投与期間別に検討した。

【対象及び方法】 対象は当科通院中の明らかな器質的脳障害を認めないてんかん男児 49 例 (原発全般てんかん 22 例・部分てんかん 24 例・一側発作 3 例、平均 9 歳 4 か月) である。以上の症例を VPA 単独投与群 (V 群、45 検体、平均 10 歳 11 か月)・PB 単独投与群 (P 群、29 検体、平均 7 歳 6 か月)・CBZ 単独投与群 (C 群、25 検体、平均 8 歳 1 か月) に分けた。そして投与開始後 1) 1 年未満・2) 1 ~ 2 年・3) 3 ~ 4 年・4) 5 年以上の各投与期間別に、身長 SD score (HSDs)・骨年齢/暦年齢比 (BA/CA)・血漿 Sm-C を検討した。なお血漿 Sm-C については当教室で得られた同年齢正常対照群に対する SD score を用いた。また各 AED 間での比較も行なった。

【結果】 (1) HSDs: V 群では 1 年未満 $+0.35 \pm 1.44$ に比し、3 ~ 4 年 -0.54 ± 0.51 ($P < 0.1$)、5 年以上が -0.81 ± 0.77 ($P < 0.05$) と有意に低下した。P 群では 1 年未満 $+0.08 \pm 0.06$ に比し 5 年以上が -0.88 ± 0.62 ($P < 0.02$) と有意に低下した。C 群では投与期間による有意な低下は認めなかった。(2) BA/CA: V 群では 1 年未満 0.81 ± 0.26 で投与期間による有意な変化は認めなかった。C 群 + P 群でも 1 年未満 1.0 ± 0.16 で投与期間による有意な変化を認めなかった。(3) TS_{Sm-C} SDs: V 群では 1 年未満 -0.49 ± 1.22 に比し 5 年以上 -1.37 ± 0.67 と有意に低下した ($P < 0.05$)。P 群・C 群では投与期間による有意な低下を認めなかった。V 群の 1 ~ 2 年投与例 -1.28 ± 0.80 が C 群の同投与期間例 $+0.02 \pm 1.05$ に比し、有意に低値であった ($P < 0.01$)。なお DS_{Sm-C} も同様の傾向であった。

【結論】 V 群では投与期間が長期になると Sm-C 分泌が抑制され、身長発育が低下する傾向が認められた。